東北大学高等教育開発推進センター編

『大学教員の能力：形成から開発へ』
（高等教育ライブラリ7）

（東北大学出版会，2013年，207頁）

渡邉　聡（広島大学）

本書は，教育関係共同利用拠点事業のための調査研究として，東北大学高等教育開発推進センターが2010年12月から2011年1月にかけて実施（23大学・短大を対象，北里大学獣医学部については2012年12月に実施）した「大

学・短大教員のキャリア形成と能力開発に関する調査」に基づき書き下ろされたものである。筆者(羽田貴史氏)が第1章で述べているように，本書の意図はアメリカに30年遅れて「大学教員の能力形成のメカニズムや要因を明らかにし，教員自身の自己開発や機関・組織レベルにおける支援措置，能力開発の方策樹立に役立てること」(p.13)としている。ただし,本書が出版される以前に『「大学・短大教員のキャリア形成と能力開発に関する調査」報告書』が既に刊行されており，調査結果の細かな基礎集計については同報告書に抄録されているため，本書では割愛されている。その分，本書第2章において調査の概要は扱っているものの，第3章以降では図表や統計分析をふんだんにもちいた分析結果の考察に的を絞り，より踏み込んだ内容になっているといえる。

本書の構成は大きく第Ⅰ部と第Ⅱ部に分けられ，第Ⅰ部では「大学教員の労働と能力形成」を，第Ⅱ部においては「大学教員のキャリアステージの模索」をテーマとして設定し，各部の中でさらに複数の執筆者によるオムニバス形式の章立てとなっている。本書の主な構成と執筆者は以下のとおりである。

はじめに（木島明博）
第Ⅰ部　大学教育の労働と能力形成
　第1章　大学教員研究の新段階―30年遅れのキャリアステージ研究―（羽田貴史）
　第2章　「大学・短大教員のキャリア形成と能力開発に関する調査」から見る大学教員（猪俣歳之・立石慎治）
　第3章　就職動機と現状認識の関連性―研究と教育に対する動機の相互作用（串本剛）
　第4章　大学教員の労働時間―実態と課題―（北原良夫）
　第5章　大学教員の管理運営能力の形成（高野篤子）
　第6章　大学教員のワークライフバランス（安保英勇）
　第7章　キャリア形成・能力・ワークライフバランス―教員調査からみた「教育・研究能力」の獲得・阻害要因―（藤村正司）
第Ⅱ部　大学教員のキャリアステージの模索
　第8章　データから見るキャリアステージの類型（丸山和昭）
　第9章　キャリアステージの上昇と職務経験（猪俣歳之）
　第10章　キャリアステージから見る能力発達と経験の構造（立石慎治）
　第11章　大学教員の社会化試論（羽田貴史）
おわりに―大学教員の世界と教員の能力開発（羽田貴史）

第2章において本調査の概要が示されているが，主に東北地域大学教育推進連絡会議に加盟する大学と，同会議には加盟していないが協力機関として調査に参加した大学・短期大学に勤務する常勤教員8,435名を調査対象としており，有効回答者数2,453名（有効回収率29.1％）の情報を含む優良な個票データを分析基盤としている。抽出サンプルの約半数（1,230名）が東北大学に勤務する常勤教員であるため，研究や教育に対する各教員の意識や勤務時間の配分割合，大学教員としてのさまざまな能力形成に対する認識等に関する分析結果では，大規模な研究大学である東北大学の特性や教員の意識，経験等が全面に出ている点は否めないが（特に，第3～6章），重回帰分析（第3, 6章）や潜在クラス分析（第8章）といった多変量解析手法をもちいることにより可能な限りの適切な分析処置を試みている。また，第7章では東北大学教員のみを分析対象として絞った統計分析と考察がおこなわれており，わが国の大規模研究大学における教員のキャリア形成，能力の獲得・形成やワークライフバランスに対する意識を探る上で貴重な分析結果を提示している。

多変量解析手法をもちいた分析内容ではないが，職階や年齢，大学教員になる以前の経験職種といったカテゴリー別による大学教員の管理運営能力の獲得・形成との関連を考察した第5章は，「実践的且つ学術的な関心が寄せられた形跡はあまり見られない」(p.77) 当該領域の分析結果として興味深い。また，一般労働者と比べても勤務時間が長く「「過労死ライン」とされる60時間と同水準」(p.91) の長時間勤務に及ぶわが国大学教員のワークライフバランス（第6章）に関する論考からは，高等教育研究における新たなテーマとしての今後の発展性が期待できる内容であることが窺える。

大学教員のキャリアステージをテーマとする第Ⅱ部に含まれる分析では,やはりパネル（追跡）調査ではなく,一時点での調査結果から得られたクロス・セクション・データであるが故の分析課題が残る。今日の極めて流動的な大学教員のキャリア形成や課題を析出するためには，静的なクロス・セクション・データを基にした分析にはやはり限界があるといえるだろう。この点については筆者の一人である丸山和昭氏（第8章）も考察の中で言及している。パネルデータの蓄積は，高等教育に限らず，おそらくはわが国の社会科学分野の実証研究が抱え

る今後の課題といえるのかもしれない。特に大学教員のキャリアステージ研究においては，世代間のコーホート（同胞）効果が潜在すると考えられるため，回顧的変数をもちいた分析ではなく，パネルデータに基づいたより正確な動的視点でのキャリアステージ分析が第9章および第10章における研究課題といえるだろう。

本書の「大学教員の能力」というタイトルに，「―形成から開発へ―」というサブタイトルが付けられたのは「意図的な教育は，自然的成長である形成とは区別されてなりたつ」という「教育学の命題」に基づいている，と筆者（羽田氏）は冒頭で説明する。大学教員による積極的且つ前向きな姿勢での能力の獲得と形成が必要であることを意識したものであろう。これらの取り組みを支援し，長期的且つ政策的に企画・実施していく上で，本書は極めて有効な判断材料と分析結果を提供してくれるものと考える。